

応するもので、言わば人間存在の三様の在り方を表示している。しかし、スピノザにおいてはこのような人間の三様の在り方はいずれの中心をも貫流しているものは自然 (nature) である。従って、自然と対立し、自然を超越するという方向で徳が完成されるのではなく、むしろ自己の内なる本源的な生命としての自然 (内的自然乃至内的生命) を顕現せしめ、自己が一切万有の根源且つ始源である能産的自然 (natura naturans) としての神の内に在ることを内観し、以て神を愛することが徳の究極的完成である。

以上、徳の觀念を通して見られたスピノザの人間觀の根本的性質は、人間の内的自然を基調とする人間の把握であるということが出来るであろう。しかし、このようなスピノザの人間觀は、人間の主体性及び人間の自由の問題と結びついて同時に問題となつて来る根本悪 (Radikalböse) の問題を、人間存在の積極的な問題 (自由意志の問題) として主題的に問うことは出来なかった。それ故に、人間的自由の問題及び根本悪の問題等は後のドイツ觀念論 (カント・シェーリング等) によって批判的に問われなければならなかった。

行という面よりみたる浄土教興起と展開

林 一 宗

一 宗教の究極的課題は生死超克にあることは言うまでもない。

「真面目に宗教的天地に入ろうと思う人ならば、釈尊がその伝記もて教え給ひし如く、親も捨てねばなりませぬ、妻子も捨てねばなりませぬ、財産も捨てねばなりませぬ、国家も捨てねばなりませぬ、進んでは自分そのものも捨てねばなりませぬ。」と清沢満之が語る如く、本来仏教においては釈尊自身が範を示された如く、捨家棄欲の出家道を歩むべきであり、身命を賭する厳しい修行が要求されていた。然るに浄土教においては行は人間の修する自力難行が廃され、如来廻向の他力大行へと転換せしめられている。何故に仏道における「行」が、人間の修する挙体的な実践行為より、如来廻向の大行へと転換せしめられねばならなかったのであらうか。ここに視点を定めながら大乘仏教の興起、浄土教の開顯への底に流れる本願の歴史たる法蔵菩薩精神にふれてゆきたいと思う。

二

浄土教の聖典の上でまず注目させられるのは、竜樹の『易行品』であり、人間の修する自力聖道の難行なるに對し、念仏の教えは信方便易行の道として明らかにされている。勿論竜樹をして易行を説かせる法蔵菩薩精神の伝統がその底を貫ぬいて流れているのであり、竜樹はそれを明らかにせんとしているのである。彼は「発願して仏道を求むるは、三千大千世界を挙ぐるよりも重し」と仏道を求むることの難事たることを明かし、「身命を惜まらず、昼夜精進して頭燃を救ふが如くすべし」と身命を賭して修行すべきであると仏道の厳しさを語る。

人生の最大事たる生死を超越せんとするに、生命を賭すること

は決して無理難題ではない。古来より仏道を求める者は「朝ニ道ヲ聞カバ、ユウベニ死ストモ可ナリ。只思ヒ切ツテ、明日ノ活計ナクバ、飢死モセヨ、寒死モセヨ、今日一日道ヲ聞テ、仏意ニ随ツテ死ント思フ心ヲ、先ツ発ス可キナリ」と道元も語る如く、仏道を修するに身命を捨てゝる決意は当然のこととされてきた。その事は逆に、真摯に仏道を行ぜんとする者にとつて、身体性の問題が如何に障害となつて悩ませるかを物語るものである。従つて修行の最大障害たる身体性の問題を一挙に超克せんとして、仏教では大乘菩薩道に顕著にみられる菩薩の「捨身の行」が説かれていたのである。捨身の行によつて人間は一挙に身体性の問題を解決して仏道を成就せんと願うのである。大乘菩薩の捨身の行は、その原型はジャータカに求められるが、そこでは積尊の本生物語として、自己の身体を投げ捨てる難行によつて菩薩行を成ぜんとする物語が、アーリアン民族の伝承して来た民話を素材としながら語られてくるのである。ここに説かれる厳しい捨身の行も、単なる本生話としてでなく、寧ろそこに苦悩する群萌が、仏道修行の最大関門たる身体性の問題を一挙に解決せんとする痛ましくも厳しい悲願がこめられているのを感じるのである。そこで行として最も厳しい「捨身の行」を説くジャータカについて考えながら、人類の悲願たる生死超克の根底にある重要な問題にふれつつ、浄土教の興起と展開について考察してみたい。

三

ジャータカは単に仏滅後時代を経るに従つて、積尊への憧憬の念が高まり、積尊を理想化・神格化していったものとだけ言うわ

けにはいかない。寧ろ仏道の根底に流れている人類の悲願とも言ふべきものが、明らかにされてくるのではなからうか。仏滅後、部派仏教が次第に理論的哲学的なものになり、苦悩する一切群萌を真に救済するものから、ますます遊離していくことへの鋭い批判が、素朴な民話を素材とするジャータカによつてなされているを感じる。アーリアン民族が数千年間伝承して来た民話の中に蔵されていた深い宗教的感情が、ジャータカという形をとつて仏教の歴史の上に登場して来たことの意味は、重要なものがある。名もなき苦悩の群萌が数千年深め来たつた素朴ながらも豊かな宗教的感情が、ジャータカとなつて結実し更に大乘仏教興起へと展開し、遂に一切衆生を救済せんとする本願念仏の教えの開顯となるのではなからうか。

干潟博士の説によると「大乘仏教思想の起こるには菩薩思想の発生を前提とする。その菩薩思想の発生には、ジャータカが盛んに作られたところが主導因となっている。」(『ジャータカ概観』)と言われる如く、ジャータカの出現が菩薩思想の母胎となり、やがて授記物語が出て来たと説かれる。『四分律』に説かれる授記物語は、青年 Megha に対して、時の仏たる然燈 Dipamkara (定光ともいう) が授記するもので、これはやがて大乘仏教へと展開して法蔵菩薩説話ともなってくるものである。このようにジャータカが盛んに出来たことは、やがて菩薩思想を起し、一方では授記思想を産み出すと共に、他方では六波羅蜜の菩薩行が定まり、それと伴なつて苦悩する群萌の願いが大乘仏教を興起せしめたとする干潟博士等の資料を重視した実証科学的研究法による説明

は、よく理解が出来る。しかしややもすると仏教の根本生命たる宗教的精神を見失ないがちになりやすい。表面に現われた經典をして經典たらしめるもの、即ち積尊をして仏陀たらしめ、ジャータカを出現せしめ、大乘仏教を興起せしめているその根底を貫ぬく宗教的生命が、人類の深い精神的伝統を背景としながら厳然としてあることを忘れてはならない。人類の深い宗教心の歩みの歴史、その伝統こそが本願の歴史であり、法蔵菩薩精神である。その根本的精神に目覚めていくこそが、仏道における「行」の本質的意味であることを、親鸞は明らかにしたいのであろう。アーリアン民族が数千年の間伝承して来たった深い宗教心の歩みが法蔵菩薩精神として結集され、阿弥陀如来の本願として説き明かされ、そこに帰するところに一切衆性の救済される道を明らかにしたのが浄土真宗である。

四

宗祖親鸞が心血を注いで求めた仏道は、人類の歴史を厳然と貫いて流れる法蔵精神に目覚めることにより、一切衆生が自然に本願により救済されていく道であった。吾等苦悩の群萌が無数の生死を賭けて求めに求め、遂に得た仏道である。曾我先生はそのことを「吾等の祖先が一心にそれを求めて、一向にその上に歩み来たった所の仏道々場の歴史であります。決して此頃の人が考えて居るように、根本仏教から小乗仏教に、小乗仏教から大乘仏教に、大乘仏教から一乗仏教に、又自力教から他力教にと言うように、所謂進化発展したる歴史ではない。」(『親鸞の仏教史観』)と明らかにされるように、仏道を顕現せんとする仏道々場の歴史

は、厳然としてあり、人類の宗教心の歩みの根底に常に輝いてるのである。積尊が世に出るも、出なくても積尊をして仏陀たらしめた仏道の根本精神は変わるものではない。曾我先生は「仏教は積尊に依って創められたものでないのでありまして、何か知らぬけれども積尊と言ふものは一つの從來ありました所の伝説の中に呱呱の声を挙げさせられたのではないでしょうか。一体伝説には民族の久しき間の実践実行の根拠がある。又同時にそれは民族の実践実行の底にもって居る所の純粹の要求又は感情である。その長き深き伝説、さう云ふ深遠なる所の伝説伝統の中に生じて、其伝説伝統を選択統一して、さうして未来に生れた吾等衆生の歩むべき方針を明らかにせられた。それが詰り積尊の証、積尊と云ふものゝ出世の位地と云ふやうなものでなからうか」と語っている。仏教は積尊によって始まったのではなく、積尊をして仏陀たらしめた背景、民族が伝統して来た深い宗教心の伝統、それを積尊が統一したものが仏教である。仏教は仏教以前に根源を持っているのである。ジャータカも仏滅後に出現したとは言え、その精神的内容は深く数千年のアーリア民族の宗教的伝統を明らかにするものであり、積尊以前の精神的背景をジャータカに結集したものである。民族の祖先が生命を賭して求め続けて来た广大無辺なる宗教心の伝統が明らかにされ、積尊をして積尊たらしめている深い内面的精神の背景が、全貌を現わにして来たのが大乘經典の世界である。積尊以前の深い宗教的精神の伝統は、過去へと次第に深められ、過去七仏や過去五十三仏とますます深くアーリアン民族の伝承して来た宗教心の世界がほりさげられ、經典となつてそ

の全景を人々の前に顯わしたのである。それが菩薩思想となり、授記物語となり然燈仏説話を成立せしめ、更に深められてやがて『無量寿経』において五十三仏が説られ法藏菩薩精神の顯現となり、遂に一切の苦惱する群萌が真実に救済される道が開顯されたのである。

以上「行」という実践的な仏道の歩みを手がかりとしながら、それが次第に宗教心の歩みに深められ、ついにアーリアン民族の伝承して来たった深い宗教的精神の歴史に深められ、法藏菩薩精神に目覚ましめられていったことを、簡単ながらのべて見たのである。「浄土教の興起と展開」とは、仏道精神を深くその根源へ逆のぼって、奥へ奥へと向って人類の宗教的精神の蔵の扉を内へと開き、深く自己の根源を明らかにすることと軌を一にするものである。

本願の自証

井上恵樹

本願が本願であることを自証するものは『大経』である。しかし『大経』が本願自証の契機として求めたものは『観経』であろう。「方便真实之教」「観経」は機と法との深き交流を物語たる。そこには韋提の如く、「実業の凡夫」であるが故にこそ「權化仁」と菩薩である不可思議が示される。その事は、『観経』が実業の凡愚の上に本願の真实を自証せる場である事を示そう。こ

の意味で『観経』の意義を問うてゆく。

『観経』「序分」には宿業の衆生韋提の苦惱流転と浄土請求が展開せられる。それは宿業を背負って歩み行かねばならぬ凡愚の在り様、歩み行き、というものを表わしている。衆生行が「行業」「業行」といわれるのはそれであろう。「教我觀於清浄業処」とは、宿業の彼方に自身存在の意義を発見せんとする宿業存在の限りなき真摯な歩み行きなのであり、そこに「観無量寿」して阿弥陀に問いゆく。

而してこの衆生の歩み行き、在り様に呼応して思われるは「阿弥陀仏者即是其行」「立最即行」なる、仏がそのまま行である如き、如来の歩み行き、在り様である。如来如去たる如来の歩み行きは善導の三縁釈に示される如く、衆生の歩み行きに一つに感応する。ではその如来の歩み行きの内実はどうであろうか。韋提の別語に対して突然光台現国は説かれ、韋提は不可思議にも阿弥陀仏国を別選する。光台現国の韋提別選は選び待ちて一代教が説き出される如き選びであり、本源の選びである。だから諸仏の国の根底にその根源としての弥陀浄土を発見する選び、「阿弥陀本国」の選びである。そこには諸仏国土の根源力となり、諸仏をして自からの浄土・阿弥陀仏国を称揚せしめ、衆生をして別選せしめる法藏本願力としての如来の在り様がある。善導の『大経』科文顯出が示す如く、『大経』の真实智慧海が衆生海の真底に從如来生する如き、如来の在り様が光台現国である。韋提の「教我思惟教我正受」の間は如来自らが如来である事の内実を問うものである。如来の住する報土は即「願土」であって、報土は報土の内